

教員免許状更新講習 2019

「コミュニケーション・スキルアップの3日間!」レポート

開催日：8月10日（土）～12日（月）

アート・コミュニケーション研究センター(acc) 研究員 吉原 和音

2009年度より当センターでは、学びの場面における「コミュニケーション・スキルアップの3日間!」と題して、教員免許状更新講習を開催している。本年も、ACOP（対話型鑑賞）の基礎プロセスである「みる・考える・話す・聴く」を軸に、様々な形式で実施されるワークショップ・レクチャー・ディスカッションを通して、コミュニケーションスキルを問い直す3日間の講習を行った。

ー1日目：みる。そして柔軟な関係性を構築するー

イントロダクションに続いて、「鏡をみながらさかさまの世界を歩く」、目隠しをした人に絵を言葉で伝える「ブラインドトーク」の2つのワークショップから講座がスタートした。

鏡の体験では、先ほどまで何気なく歩いていた場所でも、視界が逆転しただけで、他者とコミュニケーションを取らなければ安全に歩くこともままならない体験を通じ「他者の存在の重要性を実感」していただいた。「いかに自身の限られた視界の中でしか物事を見ず、自らの解釈にしたがって行動を決定してきたことに気づき大きなショックをうけた」という言葉にもあるように、他者に的確に情報を伝えるには、自分の視点だけではなく、他者の視点をも観察し想定した上で伝えなければ、伝わらないことを体感いただけたようだ。

続く目隠し体験では、「相手と自分のイメージの違いを知り、"みえている／わかったつもりにならない"ことの大切さを学んだ」という気づきが多数生まれていた。自身が見えていることを他者に言葉で伝えるには、描かれていることを客観的に描写するだけでなく、受けた印象をイメージしやすいように具体例などを示しつつ伝える。「話し手、聴き手の共同作業が重要であり、立場は固定化されたものではない」というコメントのように、一方的に情報を伝えるだけでなく、聴き手側も伝わったことや、不明瞭な点などを聴き合い、協働する関係性を築かなければ伝わらないのだということを、実感いただけたようだ。



午後からは、グループワーク「マンガ読解」を行った。これは、マンガ作品を2時間かけて読み解いていくワークショップである。通常、一人で読むことが多いマンガを、あえて複数の視点で読み合わせる、という最初は少し戸惑いもあるこのワーク。しかし実際に読み合わせをはじめてみると、全く同じ絵をみていたにもかかわらず、ストーリーや人物像、描かれている情報や読む順序すら人によって違いがあり、全てを網羅できていなかったことに気づく。そこに他者の視点を持ち寄ることで、一見難解だったストーリーにつながりや深み、新たな見

方が開かれていく。この体験を通し、「対象には様々な側面があり、自分の見えていない部分があることをつねに意識することが重要だ」と感じていただけたようだ。



「時に確かめ合い、対等に聴き合いコミュニケーションしていくと、互いにわかった"つもり"ならず、イメージや情報を共有することができる」

私たちは日常のコミュニケーションの中で思っている以上に、みえている・伝わっている・わかった「つもり」になっている。それを意識（自覚）し、互いに確認し合うことで、質の良いコミュニケーションをとることが可能なのだという気づきをもって、初日の講座を終えた。

—2日目：聴く。学びに変換する—



2日目は「『みる』ことから始まる『発見』&『コミュニケーション』」のレクチャーからスタートした。対話型鑑賞(ACOP)についての「みる・考える・話す・聴く」概論と共に、これらのプロセスが美術だけに限らず全ての学び（教科）につながっていくことや、「知識だけでなく、意識を持ってみて考えることにより得られる学びとは何か」について、改めて考えをめぐらせつつ、午後のワークショップへと続いていった。

次のワークショップ「聴く・応答する」は、相手の発言を注意深く聴き、意図を相手に確認をとりながら会話をするというシンプルなワーク。しかし、この意図を的確に聴き取り、聞き返すということが意外と難しい様子で、四苦八苦される先生が多数見受けられた。

「いかに自分がしっかり聞いていなかったことをガツンと思い知らされた。同時に、子どもたちに「きちんと聞きなさい」と言ってきたけれど、自分も聴くことに対して工夫や意識を持って取り組んでいたか疑問に思った」とショックを受けられた先生もおられたようだ。

一方で、この的確な確認ができたことにより「発言の意図（言わんとすること）を、意識して捉え、それを整理し言い換えて伝えてもらったことによって、発言した私自身も気づいていなかった核心を自覚することができた」という現象も起きていたようだ。まさに、意識して聴き、それに応答することは、他者への変化や新たな学

びを促すことにもなり得るようだ。



ここでようやく、対話型鑑賞(ACOP)による作品鑑賞を、1作品1時間とじっくり時間をかけて鑑賞を行った。「同じ作品を見ていても、人それぞれが目にするポイントや考え感じ方は様々で、それらをぶつけ合い聴き合うことで、多様な気づきへと向かっていく過程を感じることができた」とあるように、作品鑑賞を通じて、これまで問いなおしてきた「みる・考える・話す・聴く」を基本とした、コミュニケーションの積み重ねを一連の流れとして体感いただけたようだ。

そして2日最後にもディスカッションと小論述を行った。その中には「他者との関わりによって、私の学びが成立しつつあることを実感した」「これまでは話や学びの行く先を、自分が持っていきたい方向に誘導していたが、共に価値を作っていくことを目指したい。」ような言葉も先生方からお聞きすることができた。

学びとは、一方通行な関係性ではなく「互いに学び合える関係を築くことができるはずだ」つまり、生徒と共に学びあう存在という関係像のシフトが先生方の中で起こりつつある様子を見せ、2日目は終了した。

—3日目：アートだけじゃない。対話型鑑賞の活用形—



2日間たっぷり基礎を見直した最終日は、より実践的で多様なワークショップを体験していただいた。まず初めは、理科への応用。ゲスト講師として三重県総合博物館 大野照文館長をお迎えし「貝体新書-おとなが学ぶ二枚貝-」を実施した。ハマグリ of 貝殻をグループで観察し、対話を通じて合意形成を行い、事実に向っていくという内容である。

続いて午後からは古地図を題材としたワークショップ「古地図を対話型鑑賞しよう」を実施し、理科と同じく社会や他教科の活用事例紹介となった。それと同時に、答えを出すことが重要なのではなく、それにたどり着く

までの過程で、考え、意見交換をし、互いに協力しながらあらゆる検証・検討を繰り返すことにこそ、本質的な学びが得られるということを実感いただけたのではないだろうか。

そして、すべてのプログラムを終え「学校現場での実践を考える」として行ったふりかえりでは、得た学びを現場でどう活かすかを、教科ごとにグループに別れ、具体的な方法やそれを実戦するための自己課題を考え、発表と議論をしつつ完成させた。そして最後にそれらを宣言することで、一連の講習の締めくくりとした。

3日間を通して先生方はいかに「コミュニケーション」「学び」について考えていただけたのか。最後にいただいたコメントをいくつかご紹介する。

この講座で一番に気付かされたことは「分からないから面白い」ということでした。

自分はいかに先入観でものを見ていたか。それを教えてくれたものが「他者との対話」だった。対話を通じて、今までの自分の考え方や偏り方がはっきりとしてきて恥ずかしくなった。

一つの事実をどう解釈するかは、各々の価値観や経験（知識）に左右されるが、「知識より意識を持つてみること」がコミュニケーションにおいて大きな意味を持つことや、単にみえているものを意識的に「みる」ことがいかに重要なのかを実感した。

今回の講座で、「みる」こと「聴く」こと、そしてそれらを言語化するために観察・推論・根拠・仮説・推敲・再考のプロセスを他者との対話を通して行うことを学んだ。これらを現場で具現化していくには、まず私自身が冷静になること、失敗を恐れないこと、恥を捨てる必要があるだと痛感した。

学び合う場を成立させるためには、教師が発するいわゆる「正解のある問い」ではなく「正解のない問い」を自ら立てられる課題を提供することが必要である。その上で、それらの問いを更に深め、共に学び変容していく者としての”教員像”に私も近づいていきたい。



本講座は、「コミュニケーション・スキルアップ」と銘打ちつつも、いかに学びを他者と共有し、互いに変革を促すことができるか、という「生きる力」の育成が求められるこれからの教育現場への学びのあり方を問いかけている。本講座を経た先生と生徒との間に、より柔軟で主体的な学びの関係が築かれていくことを期待して、レポートを終えたい。